

全校の皆さん、おはようございます。

夏休みが終わり二期が始まりました。まだまだ暑い日が続きますが、この二期が終わる頃には季節は冬に変わっています。三年生はもう何ヶ月かすれば高校を卒業し、それぞれの新しい道を歩み始めます。季節の移り変わりをはじめとして、これから大きな変化が待ち構えています。

生き物は基本的に「変化」を嫌うそうです。特に人間は精神的にも大きな負担を感じるようです。「卒業して新しい環境に変わるのは嫌だな」「住み慣れた場所を離れるのは嫌だな」と思っている人もいるのではないでしょうか。自分を取り巻く環境や人間関係の変化、また自分自身の体や心の変化に負担を感じてしまうものです。ですから、何事も変わりなく、波風立たず、慣れたところで心地よい状況がずっと続いてくれればいい、と私たちはどこかで期待しているように思います。

なぜ私たちは「変化」を嫌うのか、そこには「不安」という感情があります。「不安」とは、つまり「分からない」ことに対するストレスです。新しい環境や人間関係でうまくやっていけるかどうか、今までやったことないことが成功するのかわるか、自分の未来がどうなっていくのか、こういった「分からない」ことに向き合うとするとき人には「不安」が生まれます。

私たちは「変化」を嫌っているというより、きっとこの「不安」が嫌なのです。ですから、さまざまな手段で「不安」を自分から遠ざけようとしています。遠ざけるためには「力」が必要で、お金の力、医療科学の力、学力、権力、武力などさまざまな「力」を頼ろうとします。このような「力」によって、何が起るのか「分からない」状態を少しでも減らそうとするのですが、人間は完璧ではありませんから「力」で全ての不安をなくすという方法にはそもそも限界があり、そこに無自覚だと不自然な形で「力」への執着や依存が生まれます。平和活動で知られるマハトマ・ガンジーは「私たちの最大の敵は憎悪ではなく不安である」と言いました。人間の争いや暴力の裏側には「不安」が隠れているとガンジーは考えました。自分を強く見せたい人ほど、実は「不安」なのかもしれません。

宗教には人間の「不安」をなくす力があると期待する人もいますが、私たちが学んでいる浄土真宗は「不安」をなくすための教えではありません。親鸞聖人は「明日ありと思う心のあだ桜 夜半に嵐の吹かぬものは」という歌を詠みました。今日は美しく咲いていても明日はどうなっているかわからないのが桜の真実です。しかし、「不安」に心が支配され大事なことを忘れ、目の前の桜よりも天気予報ばかり気にしているのが私たちです。全てを「分かる」ための宗教ではなく、「分からない」ものを「分からない」ままに受けとめる、ここに念仏の教えの要があります。